

## 日米宗教思想の再構築 思想空間法を用いた体系化の一例

黒崎 浩行<sup>†</sup> 弓山 達也<sup>††</sup> 渡辺 光一<sup>†††</sup>

宗教思想を構造的、体系的に把握しつつこれを調査によって精緻化するための第一歩として、宗教思想のコンセプト要素を研究書・論文と啓蒙的概説書をもとに収集し、研究者の視点と市井の視点を統合しつつデータベース上に再構築して思想構造のツリー状表現を描出した。その方法をとるに至った理由・背景と、具体的な構築方法を説明する。

### Reconstruction of Religious Thoughts in Japan and U.S. A Case of Systematization Using Thoughts Space Method

Hiroyuki Kurosaki<sup>†</sup> Tatsuya Yumiyama<sup>††</sup>  
and Mitsuharu Watanabe<sup>†††</sup>

The authors constructed a database that stores a tree of elements of religious thoughts collected from both publications of previous academic studies and popular books. As a result, the database integrates viewpoints of academic researchers and ordinary people. This paper illustrates the reason and background of this method and the concrete way of constructing the database.

#### 1. はじめに

われわれの調査研究では、現代における生活世界と宗教性の接点として「体験談」に注目し、それが受容される要素を測定、分析することを目標としている。しかしながら、宗教性を国際的に比較可能な仕方にとらえることは容易ではない。例えば「神は存在する」とする回答が米国では9割以上、日本では3~4割という結果だけをもって日本人の宗教性の低さが指摘されることがある。このような宗教性把握の一面性を克服するための国際比較調査の開発が進められている[1]が、思想研究の特殊性からそこに直ちに構造化手法を当てはめることは合理的ではない。そのためわれわれは、ホップ・ステップ・ジャンプでメタファーできるようなスパイラルな研究プロセスである「思想空間法」を開発し研究を進めている。ここでは、初めの第一歩としてできる限り低コストで思想コンセプトの初期構造を用意し(ホップ)、それに基づいてコンセプトおよびコンセプトを含んだ物語構造(narrative structure)としての体験談への反応を調査データとして収集し(ステップ)、そしてそのデータを用いて構造を精緻化する(ジャンプ)していく。本研究会の別稿[2]にて説明しているその全体像を踏まえ、本稿では「ホップ」部分の具体的な内容を説明する。

#### 2. 従来の外的な思想研究の問題点

われわれは、思想空間法を用いて諸宗教の教義・思想要素を体系化するにあたり、FreeMind[3]とデータベースを用いてゆるやかに構造化することにした。「ホップ」をそのように進めた理由・背景を宗教学という研究領域に即して説明すると、次の2つの点を考慮したためである。(1)経験科学的な宗教理論が体験談受容の理解に与えるものは外的な枠組みにとどまりがちで、それらは体験談に含まれる内的なコンセプト(人々が信念として信じるどころの教義・思想の要素)の区分とは無関係であること、(2)具体的教義・思想の文化依存的な表現をできるかぎり一般化する必要があること。

宗教ないし宗教性をどのように定義するかは、研究者によってかなり異なっている。1961年に文部省調査局宗務課がまとめた『宗教の定義をめぐる諸問題』[4]では、国内外の宗教研究者、哲学者、思想家による宗教の定義が107編、抜粋されている。ドイツの宗教学者オットーは、「宗教はこの世のものとは全然別な聖なるものに関すること、

<sup>†</sup> 國學院大學神道文化学部  
Faculty of Shinto Studies, Kokugakuin University

<sup>††</sup> 大正大学人間学部  
Faculty of Human Studies, Taisho University

<sup>†††</sup> 関東学院大学経済学部  
Faculty of Economics, Kanto Gakuin University

それは非合理的な、驚嘆し戦りつさえするほどの秘義である」と、「ヌミノーゼ」概念を中心として宗教を定義する。他方、アメリカの社会学者パーソンズは、宗教を、人々が合理的に扱えない状況に対応するために発展させた、人間存在に根本的な価値を与える「信念、行動、制度の複合体」として定義する。哲学者や宗教思想家まで含めると、形而上学的、超越論的、経験的といった研究態度・方法論の違いや、そもそも対象とする「宗教」の領域画定の違いなどにより、多様な定義が錯綜していることがわかる。

経験科学的方法論により、体験談受容の分析に役立つ先行研究としては、ロフランド＝スタークによる回心ないし入信過程に関する理論[5]や、現世に対する基本的態度に関するヴェーバーの類型論[6]、入信動機に関わるグロックの剥奪理論[7]、グロックによる宗教性の5次元（信念、行動、体験、知識、効果）[8]などが検討の俎上に乗った。しかしながらこれらの理論は体験談を構成する物語の外在的な要素の類型化に用いることはできても、体験談において受容される内在的なコンセプトを類型化して分析できるものではない。

他方、体験談に内在するコンセプトの類型化を既存の宗教理論に求めた場合、先述のような錯綜した状況に巻き込まれることになる。そのなかで、ファン・デル・レーウらが提唱した宗教現象学のアプローチは大きな見取り図を与えてくれる[9]。宗教現象学は、宗教史学が提供する事実資料に多くを負いながらも、それらを宗教の起源や発展段階の叙述に結びつけるのではなく、またそれらの心理学的な意義を問うのでもなく、当事者ないし研究者自身が体験（*erleben*）したものを構造化・図式化して把握（*begreifen*）し、これを公言（*sprechen*）することにより学的討議に付するという方法をとる。そうして神、人間、神と人間との相互行為、神と世界との関わり、宗教の歴史的動態といったさまざまな宗教現象を体系的に秩序づけ、その相互関係を理解可能なものにしていくことを目指すものである。だが、その成果として著された体系的記述を経験的に検証する手段をもたないという難点がある。いずれにしろ、既存理論の整理統合のみでは新たな知見が生まれにくい。日本における宗教社会学の展開を振り返った西山茂は、欧米の理論の安易な適用に走らず、実証的な調査にもとづいて独自の類型を見いだした点を評価しており、その代表例として新宗教における「生命主義的救済観」を挙げ、それが「現世利益」と「救済」の捉え方に根本的な理論的反省を促したことを指摘している[10]。こうしたことを考慮すると、既存理論のみに頼らず、それらを具体的な諸宗教における教義・宗教思想要素の収集作業とつなぎあわせつつ、文化依存的でない一般的な思想要素の表現を導き出し、さらにそれを実証的データによって検証する必要があると言える。

### 3. 内在的なコンセプトの収集とツリー構造の構築

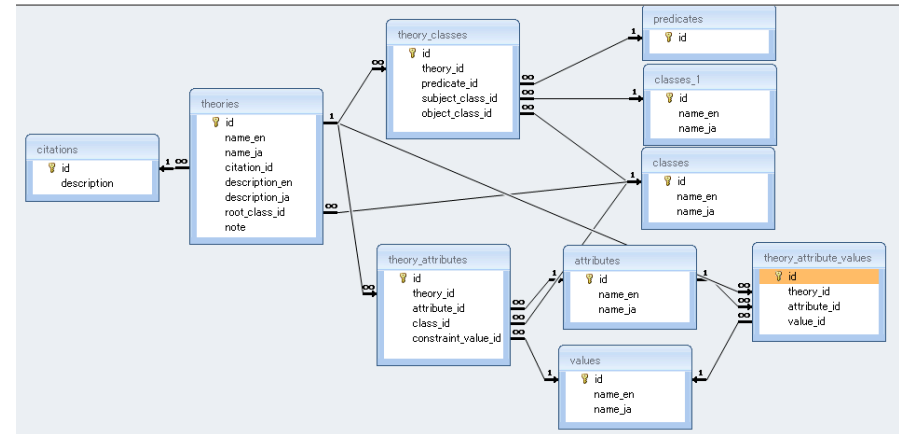


図 1 設計当初のテーブル構成とリレーションシップ

われわれは体験談受容をめぐる調査研究にあたり、予備調査の質問項目や先行理論などを Microsoft Access を用いてデータベース上に統合管理している。当初、体験談受容の諸要素の類型をデータベースに格納するにあたり、既存理論を参照することから出発したため、これに関して図1のようなテーブル構成とリレーションシップを設計していた。

現世に対する基本的態度に関するヴェーバーの類型論を例にとると、それは「現世肯定—現世否定」、「現世指向—現世回避」、「禁欲的—瞑想的ないし忘我的」という3つの分類基準[6]すなわち属性（*attribute*）をもち、それぞれがとる値（*value*）の組み合わせによって諸類型（*class*）を同定できるかたちになる。また、コンセプト間の関係は述語（*predicate*）により定義される。実際の理論では各属性の後者の値が次の属性において分岐するツリー構造になるため、単純な無ラベルグラフではなく RDF（Resource Description Framework）のように各属性の値によって分岐するラベル付き有向グラフを表現していることにもなる。その意味で、Semantic Web やオントロジーツールaのようなシンタクスによる意味論の管理を意図していたといえる。

a オントロジーツールを利用しなかった理由は別稿[2]を参照のこと。それに加えてアンケート調査の実施は Access データベースで管理したほうが容易であるという実際的な事情もあった。

しかし、前節に記したような宗教学の研究史的事情により、それは困難で錯綜した（まさに高コスト低リターンな）作業となることを経験した。そこで、既存の類型論をもっとゆるく捉え、むしろ具体的な諸宗教における教義・思想用語を収集して、そこから文化依存的でない一般的なコンセプトの表現を導き出すことを優先することとした。そのため、任意の属性や述語を別テーブルとして管理することはやめ、諸コンセプト間の親子（汎化）関係・説明関係・因果関係などあらかじめ定義された関係のみを格納し、全体としてツリー構造となるように管理することにした。これにより再設計したテーブル構成とリレーションシップは図2になる。

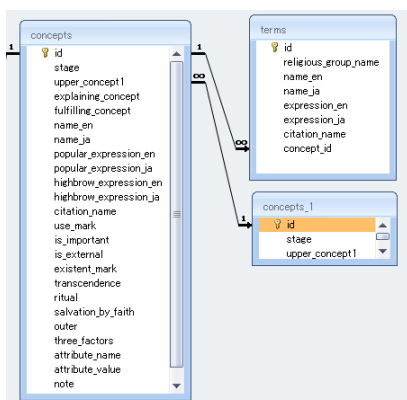


図2 コンセプトのテーブル構成とリレーションシップ

また、このツリー構造を可視化するために、フリーソフトウェアのマインドマップ作成ツールである FreeMind で読み込み可能な形式でデータを出力できるようにした。FreeMind は GUI を用いて誰でもマッピングの再構築ができるという柔軟さを特徴としており、上記のような宗教学の混沌とした状況においても、また構造的 방법에慣れていない宗教学プロパーの研究者にとっても、扱いやすいと判断したからである。そのため、FreeMind 上でツリー構造を操作して変更した結果をデータベースに再び取り込み、データベースを更新する方法も開発した。

諸宗教のコンセプトのデータ収集は、一般向けに刊行されている啓蒙書や、それぞれの宗教伝統の諸宗派を通じて幅広く受け入れられている信仰箇条などを対象に行うこととした。そのさい、体験談受容の日米比較を行うことを念頭に置き、日米両国で刊行されている書籍を優先した。そして、それぞれのコンセプト（思想・教義要素）

およびその上位概念について、専門用語による表現と、一般人にも理解可能な表現とを付け加えた。後者の表現は、体験談受容の予備調査において直接に質問項目にすることを想定したものである。既存の宗教意識調査の質問項目においてこれにあてはまるものがあればこれを採用した。

こうして収集したコンセプトをツリー構造化し、より一般的な上位コンセプトのもとで分岐するように配置し、不足すると思われるコンセプトをさらに追加する作業は、FreeMind によるツリー構造操作と、Access 上でのデータベース入力・修正とを行きつ戻りつして行った。体験談受容の予備調査を行う段階で、283 個のコンセプトを収集・体系化し、そのうち 101 個のコンセプトを質問項目として採用した。

#### 4. 結びにかえて

われわれの研究は、体験談を通じた宗教性の受容可能性に焦点を当てたものであり、意識調査の結果にもとづく検証を研究プロセスに盛り込んでいる点に最大の特徴がある。本発表では予備調査段階にあるため、教義・思想要素のツリー構造化にとどまっているが、引き続き、網羅性・体系性の確保と体験談受容の本調査による検証を進めていきたい。

本稿は、平成 20～22 年度科学研究費補助金基盤研究(B)「現代宗教性の類型化と受容可能性—体験談のデータベースとモニタリング調査—」（課題番号 20320015、研究代表者弓山達也大正大学教授）による成果の一部である。

#### 参考文献

- 1) 石井研士: データブック現代日本人の宗教 (増補改訂版), 新曜社 (2007).
- 2) 渡辺光一, 黒崎浩行, 弓山達也: 思想空間法—構造化手法と調査データを融合した思想・理念の体系化方法—, 第 87 回 人文科学とコンピュータ研究会発表会 (2010).
- 3) [http://freemind.sourceforge.net/wiki/index.php/Main\\_Page](http://freemind.sourceforge.net/wiki/index.php/Main_Page)
- 4) 文部省調査局宗務課: 宗教の定義をめぐる諸問題, 文部省調査局宗務課 (1961).
- 5) Lofland, J. and Stark, R.: Becoming a World-Saver, American Sociological Review, Vol.30, pp.863-874 (1965).
- 6) シュルフター, ヴォルフガング: ヴェーバーの再検討, 河上倫逸訳, 風行社 (1990).
- 7) Glock, C.Y.: The Role of Deprivation in the Origin and Evolution of Religious Groups, in Religion and Social Conflict, ed. R. Lee and M. E. Marty, Oxford University Press, pp.24-36 (1964).
- 8) Glock, C.Y. and Stark, R.: Religion and Society in Tension, Rand McNally (1965).
- 9) ファン・デル・レーウ, G.: 宗教現象学入門, 田丸徳善・大竹みよ子訳, 東京大学出版会 (1979).
- 10) 西山茂: 日本の新宗教研究と宗教社会学の百年: 実証研究の成果と課題を中心に, 宗教研究, 78 (4), pp.1109-1139 (2005).